

Title	書評：今枝法之著『現代化する社会』晃洋書房、2014年
Sub Title	
Author	澤井, 敦(Sawai, Atsushi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.104- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0104">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0104</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書評：今枝法之著『現代化する社会』晃洋書房、2014年

澤井 敦

本書は今枝法之氏（以下、著者）の三冊目となる単著である。本書を評する上で、はじめに、著者のこれまでの研究履歴を大きく二つの領域にわけて紹介しておきたい。

第一の領域は、アンソニー・ギデنز研究である。著者の最初の著作である『ギデンスと社会理論』（今枝 1990）は、単行書としては日本初のギデنز研究の書である。その後、著者は、ギデنزの『第三の道とその批判』（Giddens 2000=2003）の翻訳も手がけている。この訳書に付された「訳者あとがき」は実に四〇ページ以上に及ぶものであり、ここでは社会思想史・社会学理論からハイモダニティ論を経て「第三の道」の政策論へと至るギデنز社会学の展開が、コンパクトに、なおかつきわめて明快に整理されている。

第二の領域は、ポストモダンの社会学である。著者が2000年に上梓した『溶解する近代』（今枝 2000）では、1990年代までのポストモダンをめぐる内外の議論が整理された上で、近現代の社会変動を「ポストモダニゼーション」という過程の進展として理解する視座が示されている。著者の議論が優れているのは、単にさまざまな理論を整理して紹介するにとどまらず、それらを自らの内に吸収し新たな理論的構図として再生させた上で、さらにそれを日本社会の社会変動、そして個々の社会問題へと適用していく手腕と柔軟さを備えている点である。『溶解する近代』でも前半で理論的考察がなされたうえで、後半では、おたく、ヴァーチャル・ソサエティ、NPO、市民社会と民主化といった具体的な主題が論じられている。

ちなみに、日本では1980年代にポストモダンをめぐる議論が一種の知的流行となった。ただ、それは実質的には思想的・文化的潮流としての「ポストモダニズム」をめぐるものであった。その後、1990年代に入ると、バブル崩壊、阪神淡路大震災、オウム真理教事件、自衛隊の海外派遣、自殺者数の増大など、さまざまな社会問題が前景化する中で、ポストモダニズムは、相対主義的で現状を肯定するしかない思想であるとして、厳しく批判された。ただ、英語圏を中心として海外では、むしろ1990年代に、「思想」としてのポストモダニズムのみならず、その流行をも一部として包含する「社会変動」を把握するコンセプトとしての「モダニティからポストモダニティへ」という図式をめぐる議論が盛んに行われていた。著者の書はこうした動向をいち早くつかみ、正確に整理・理解した上で、なおかつそれを日本社会の現状に即して応用していったという点で、先駆的な業績であった。この点に関しては、評者も、海外向けの論稿の中で著者の書を紹介しつつふれたことがある（Sawai 2013: 210）。（なお付言すれば、後に、批評家の東浩紀が同様の視点からポストモダン論を展開したことにより、日本でもポストモダン論が新たな注目を集めた）。

さて、まえおきが長くなったが、本書『現代化する社会』は、以上で述べた著者のこれまでの二つの研究領域をいわば交差させつつより包括的な議論へと拡張させながら、さらなる展開を目指したものである。本書でもまた、前半の第一章から第三章までがいわば理論編、後半の第四章から第七章までがいわばその応用編と呼びうる構成がとられている。以下ではまず、各章ごとに本書の内容を簡潔にまとめておきたい。

第一章では、書名にもある「現代化」のコンセプトについて整理がなされる。ここでいう「現代」とは英訳すれば **modernity** であり、**modernity** は「近代」とも訳されるが、著者の意図は、「近代化」とそれが高度化した時点での「現代化」を連続的にとらえること、その上で、この現代化のコンセプトと「高度近代（ハイモダニティ）」「脱近代（ポストモダニティ）」「再帰的近代」といった多用される既存の概念をリンクさせ、融合させることである。著者は近代化の諸相として「民主化」「工業化・産業化」「都市化」「商品化」「合理化」「分化」を、現代化の諸相として「グローバリゼーション」「リスク社会化」「脱伝統化」「個人化」「IT化・情報化・デジタル化」を挙げ、それぞれについて詳述している。

続く第二章では、前章でえられた現代化という視点を、日本社会に適用することが試みられる。日本社会において「現代化」への構造転換が本格化するの、1990年代であると考えられる。著者は、「市民社会組織の台頭」「グローバリゼーション」「高度メディア化」「民主主義の高度化」「脱伝統化」「自己愛と多重人格化」というそれぞれの側面に焦点をあてつつ、具体的な事例にもふれながら、日本社会の現代化の様相を描き出している。

第三章では、これまでの章で論じられた現代化の進行という社会認識をふまえて、これからの日本社会のあり方に関わる処方箋を示すことが試みられる。著者は、基本的にはギデンズが提示した「第三の道」の立場をとる。ただ、ギデンズが「第三の道」を提起した1990年代と現在では状況が異なる。著者は、ギデンズ自身が2000年代以降に論じた、「第三の道」の更新版としての「漸進的改革主義」を詳細に論じ、整理した上で、国家の政策のみならず、さらには企業や市民・消費者がそれぞれの社会的責任に即した行動をとる必要性、そしてその結果として政府・市場・市民社会という三つの社会的領域の区分がボーダレス化していくというヴィジョンを提示している。

さて以上の三つの章で現代化をめぐる理論的構図と将来的なヴィジョンが提示されたのを受けて、以下の四つの章では、各論的に、現代化のいくつかの側面に焦点を絞った応用的な考察がなされる。

第四章では、現代化の諸様相のうちでもとりわけ情報化に関わる部分が「情縁（情報縁）」というキーワードを使って考察されている。インターネットあるいはソーシャルメディアの浸透は、社交能力の拡張、集合知の形成、結社・結集能力の拡張をもたらし、従来の血縁・地縁・社縁の枠を超えたつながり、つまり「情縁」によるコミュニケーション空間を開くと同時に、

それを通じて血縁・地縁・社縁のあり方をも脱伝統化していく。そしてこのことは現代化の他の側面にも関係するさまざまな社会変容、たとえば、情縁社交力格差の拡大、情報の過剰なオープン化による相互監視社会化、ネット上での分衆化による視野狭窄化と集団分極化、つながりの過剰などをもたらす。ただ同時に著者は、ネット上でのつながりがギデنزのいう「純粋な関係性」としての性質を帯びる可能性にもふれ、そこに「私的領域の民主化」の契機を見いだしている。付言すれば、本章でもまさしく体现されているように、著者の議論には、視野の広さと目配りのよさ、また、多様な側面・現象を扱いながらもそこに含まれている問題点と可能性をバランスよく提示してみせるという特徴がある。

続く第五章と第六章では、阿部謹也を中心とする「世間学」において提示された「世間」の概念を批判的に検討しつつ援用しながら、現代化する社会の様相を読み解くことが試みられる。

第五章ではまず阿部の世間学における世間概念が批判的に検討されている。そこでは、従来の議論では、個人を直接的に拘束する「イエ」「ムラ」「ウチ」といった「ミウチ」と、この「ミウチ」に「ソト」から影響をあたえる「世間」という二種類の共同体的人間関係の区別が明確になされていないこと、また、何を「ミウチ」と見るかは視点によって変わるといった動的な関係性が捉えられていないことが指摘される。

そして第六章では、前章で再構成された「世間」の概念をもちいて、現代化とともに世間がメディア化されていくこと、また、それは「ネット世間」と「マスメディア世間」の二者の相互関係の中で現れてくることが論じられている。逆に言えば、現代化のなかで従来の「ミウチ」は脱伝統化され「個人化」されていき、それと連動するかたちで「世間」もまた情縁によってつくられる「メディア世間」としての性質を強めていく。そしてそれを通じて「世間」と「世論」の融合という事態がもたらされるが、そこには『世間』の『世論』化つまり公的な対話共同体が形成される可能性と、『世論』の『世間』化つまり集団分極化や非理性的情緒の暴走が生じるという両義的な可能性がある。

そして最後の第七章では、ウルリッヒ・ベックの「個人化」の概念があらためて検討されている。個人化の過程が、家族や階級といった概念を「ゾンビ・カテゴリー」化していくこと、また、個人化の過程が逆に準政治化（サブ政治化）を促進し、新たな政治的結集の契機を生み出すことなどが、コンパクトかつ明快に整理され、論じられている。

以上、本書の内容を要約してきたが、最初にふれておきたいのは、紙幅の関係でここでは十分に紹介できないものの、以上の議論が実際には現代社会・日本社会における実に多彩で多様な現象・事例に具体的にふれつつ論じられているという点である。現代化のあるひとつの様相をめぐる説明をするにしても、そこに関係してくるあらゆる具体的な現象をあたかもすべて包括して論じようとするかのような身振りで、多くの事例について言及がなされる。そのため本書の記述は、(これはおそらく著者が日頃講じられている授業でも同様であろうと推察するが)、

社会理論的な考察であってもたいへん明快でわかりやすいものとなっている。そしてこれはまた、単に具体的事例への言及が豊富であることのみによるものではなく、著者自身が、抽象度の高い、たとえばギデンズの理論をわかりやすくかみ砕いて、しかしながら同時に理論の持つ複雑性を損なうことなく維持しつつ説明する力量を有しているからである。この意味で、本書では、現代社会、現代日本社会の全体的動向をめぐるひとつの明快な見取り図が提示されていると言える。こうした見取り図は、学生として、自らが生きる社会についての一段深い理解を求める初学者にとっても、また、自分の研究テーマをよりひろい視野から位置づけ直すことを考える研究者にとっても、有益なものであるだろう。

とはいえまた、本書を読み進める中で評者が覚えたひとつの違和感についてもここでふれておきたい。それは本書のいわば前提となっている規範的判断に関するものである。これは著者というよりも、著者が主に依拠するギデンズにもあてはまることと思うが、突き詰めたところで、ある一定の規範的判断、つまり、再帰的に自らをコントロールする自律した主体である個人と、その個人による連帯や公共圏の形成といったヴィジョンが、そうあるべきこととして前提とされている、という点である。著者自身の言葉を借りれば、たとえば、「個人の自己決定・自己選択を基礎とした実験的かつ流動的で多様な再帰的集合体が新に立ち上がってくること」となる (p. 230)。

そのため、たとえば、再帰的近代化の概念に関するベックの議論はギデンズの議論に近づけるかたちで解釈がなされているし、個人化の進展についても、ベックが言うような準政治的連帯の可能性がそれによってむしろ開かれる可能性が強調され、ギデンズの「生き方に関する政治 (ライフ・ポリティクス)」についての議論と接続するものとして位置づけられている。逆に言えば、たとえば、こうした自律した主体がそもそも現状において成立しうるのかどうか、その社会的な「前提条件」自体を問い返すジグムント・バウマンのような議論を著者はとらない。

ただ、おそらくこのことは、突き詰めたところで現れる規範的判断に関しての、著者と評者のあいだの、ある種の個人的差異に起因するものであるもののように思う。また急いで付け加えておきたいが、規範的判断と言ってもそれは通奏低音のように記述の深い部分で響いているものであって、著者の記述自体はむしろ、すでに述べたように、ある現象の問題点や可能性を多様な視角からおさえ、その光と影を、きわめてバランスよく記述するものである。そしてまた、それにとどまらず、第三章になると、こうした規範的判断を通奏低音として響かせるのではなくむしろ前面に押し出して、望ましい社会のヴィジョン、そこへの政策的な処方箋として明確かつ詳細に提示することもなされている。

かつてマックス・ヴェーバーは、社会科学の「価値自由」について唱えたが、そこには「価値からの自由」と「価値への自由」という二つの側面があった。ここでの文脈で言えば、「価値からの自由」とは表層的な自らの価値判断を禁欲し（そこから自由になり）バランスよく事実を確認していくことであり、「価値への自由」とは、そうは言っても深層のところでは必ず前提と

して存在する研究者自身の価値観に自覚的であり、自覚的であるからこそそこから距離をとれており自由である（逆に言えば、深層にある価値観に無自覚であるため知らぬ間にそれにとらわれてしまっている、ということがない）ということである。こうした二面性を有する「価値自由」を、著者の議論はまさに体現するものであると思う。

また実を言えば、こうした規範的判断については、すでに著者自身が、『三田社会学』誌上でかつて論じている。本誌『三田社会学』第 6 号には、著者の前著『溶解する近代』を扱った、友枝敏雄氏による書評が掲載されており（友枝 2001）、著者も書評に応じて「書評リプライ」を寄稿している（今枝 2001）。その中で友枝氏は、当該書を読んでまず感じたのが、「今枝氏の現実社会への鋭い感覚と、難解なポストモダン思想のエッセンスをつかむ勘の良さ」（友枝 2001: 95）であると述べ、本書を高く評価している（ちなみにこの「現実社会への鋭い感覚」という言葉を友枝氏は書評の中でこの後二回繰り返しているが、その気持ちは評者にもよく理解できるし、すでに本稿の中でも述べてきたとおりである）。

ただ同時に友枝氏が問うているのが、前述したような議論の前提となる規範的判断（とはいえその内容は前述のものとはまた別の次元のものであるが）の根拠である。これに対して著者は（基本的には当該書でなされたポストモダニズムについての解釈をめぐって、という文脈においてではあるが）、自らの解釈を「理解（言説操作）」と呼び、自らの議論を「保証なき社会変革や真理や正義の可能性に賭けたリコンセプションないし言説の再編成（ヘゲモニー闘争）を試みたもの」と理解していただければ、と述べている。またさらに、著者は、ラクラウとムフの議論を引きながら、こうした言説的介入が「たえざる社会の構造的変革と創発的進化のために有効であるでしょう」とも述べている（今枝 2001: 100）。

評者の言葉で言い換えれば、著者の研究者としての営為は、ギデンズ社会理論を自家菜籠中のものとしながら自らの現代社会理論を構築していくいわば「プロジェクト」であり、また、現実社会への鋭い感覚と旺盛かつ尽きることない知的好奇心をもって、このプロジェクトを進行させつつ、時代状況に合わせてたえず更新していく営みである。そして、このプロジェクトは、それ自体がより良き社会へ向けての言説的介入であるとのいわば自覚と覚悟をもって行われる、そうしたプロジェクトである。

「あとがき」でふれられていることだが、著者は、本書『現代化する社会』刊行の約二年半前、2012 年 3 月に脳内出血を患い、一年半の療養期間を経て、2013 年 9 月に教壇に復帰するが、後遺症もあり「あとがき」も左手で書いているとのことである。このような状況下にあって著者は本書を完成させたわけであり、評者としては著者のこの研究者としての姿勢、あるいはこう言ってよければ、覚悟に、心よりの敬意を表したい。そして、先に述べた著者の「プロジェクト」が引き続き進行し更新されていくこと、また、そのさらなる成果を手取ることを本当に楽しみに待っている。

【文献】

- Giddens, Anthony, 2000, *The Third Way and its Critics*, Cambridge: Polity Press. (=2003, 今枝法之・干川剛史 訳『第三の道とその批判』晃洋書房.)
- 今枝法之, 1990, 『ギデンスと社会理論』日本経済評論社.
- , 2000, 『溶解する近代——社会理論とポストモダニゼーション』世界思想社.
- , 2001, 「書評リプライ」『三田社会学』6: 99-102.
- Sawai, Atsushi, 2013, “Postmodernity,” Anthony Elliott, Masataka Katagiri & Atsushi Sawai eds., *Routledge Companion to Contemporary Japanese Social Theory: From Individualization to Globalization in Japan Today*, London: Routledge, 200-220.
- 友枝敏雄, 2001, 「書評：今枝法之著『溶解する近代』」『三田社会学』6: 95-8.

(さわい あつし 慶応義塾大学法学部)